

FIST

Indies HR/HM Only magazine



Others

OSUSUMETAL, HAJIMETA!, METAL NOVEL and more.....

FIST

Indies HR/HM Only magazine



Others

OSUSUMETAL, HAJIMETA!, METAL NOVEL and more.....

メタルのある風景

車から降りて目の前を見る。光と雲、そして水面がそれぞれに輝きを放っていた。よく晴れた、夏の終わり。日曜日で、少しずつ一日の終わりが近づいてきていた。強い光が斜めに落ちて水面を煌めかせていた。幾重にも重なる雲は街を覆い、複雑な形を少しずつ動かしていた。脳裏にDREAM THEATERの **Hell's kitchen**が流れた。別に理由なんか無い。僕の中の何かとナニかが結びついた。その時の僕にとって最適なものが選ばれた。普段、そんなにDREAM THEATERは聴かないのだけれど。

世界の蠢きと輝き。僕たちが手を伸ばしても触れることの出来ない世界。僕たちはただそれを見上げ、息をのむ。衝撃に打ち震える。繰り返される盛大な和音。物語の終幕。余韻の中で僕はカメラを世界に向け、数回、シャッターを切った。

僕たちに出来る事。それは、明日のためで、今日のため。自分のためで、何処かの誰かのため。世界のためかもしれないし、あの雲のためかもしれない。何が出来るのかなんて、考えない。分かるわけもない事をだらだらと考え続けるのは大いなる時間の無駄遣いだ。まずはヘッドフォンをつける。プレイヤーの再生ボタンを押す。あとは、カメラを仕舞って歩きはじめるだけだ。

さあ、これからどうしようか。



REO5128



BASS

SATOYUKI
YOSHIZAKURAVocal
&
Guitar

MASA



Drums

ahira



Guitar

DIVINE WIND

NEO CLASSICAL POWER METAL

出会いは約束されたものではなかった。今年、2011年の二月末。その日、お台場ではHELLOWEENとStratovariusの公演が行われていて、僕は一人のメタルファンとして足を運んでいた。公演が終了して外に出るとCDを配っている男性が一人。受け取って帰宅。再生して、やられた。強烈なハイトーンとドラマティックな歌詞。スピーディーな展開と高い技術。交渉を試みようか、どころではなかった。土下座してでも取材したい。心からそう

思った。そんなDivine windのメタルに対する想いや今後の展望まで含め、座談会形式のロングインタビューをお届けする。同バンドの1stマキシシングルにおいてマスタリング協力を行ったRosen KreuzのMr.G氏も緊急参戦！まもなく1stフルアルバムを全国展開にてリリースする注目必須バンド、Divine windの魅力に限界ギリギリのラインで迫った。インタビュー内に登場するバンド名等をチェックするWORD BOXのおまけつき！

オリコン何位にメタルが入りました、と かなったら逆に自分は冷めちゃう。

一本日は宜しくお願いいたします。最初のテーマ、いきなりなんですけど最近のメタルシーンについて何かコメントをいただきたいと思います。何も最近に始まったことではないけれど、日本のメタルシーンはどうも元気が無い。そのあたりについて伺いたいと思います。

SATOSHI YONEKAWA (以下SATOSHI)

「超過激発言とかしちやいそうですけど、これって僕らの名前出るんですよね？」

—はい。

SATOSHI「ヤバイところ、カットしてくださいね(笑)」

Mr.G「全体的にこうだ、って言うのはアリなんじゃない？」

SATOSHI「全体的にねえ……まあ、バンド名挙げないと難しいところなんかは挙げつつ、ね」

—本当にやばいところは(カット)やらせてもらいます。まずですね、なかなかシーンにメタルが浸透していかない、このあたりについてお

伺いしたいと思います。例えば、大手CDショップさんへ行ってもHELLOWEEN(*1)すらまともに置かれていない。そういう現状があります。

SATOSHI「今ってHELLOWEENも置いてないの!? やばくないですか？」

—お店によりけりだとも思いますけど、まずもってHR/HM(*2)のコーナーが無いですね。

SATOSHI「そうですね、確かに」

Mr.G「間違っレゲエのコーナーに置かれてたりね(笑)」

—「そういう現状、日本のシーンの中でメタルを貫かれてやっていらっしやる、その思いを是非お願いします」

SATOSHI「んー……じゃあ、ジャンルの幅広いMASAちゃんから……」

MASA「えー……あー……まあ聴く人からすれば好きだから聴くし、聴かない人は嫌いだから聴かないって、それだけですからね。こういう企画で言うのもアレなんですけど、やっぱりそれがあるべき姿じゃないですか」

WORD BOX

*1 1984年にドイツのハンブルグで結成されたHMバンド。メンバーチェンジを繰り返しながら現在までに13枚のスタジオアルバムを含め多数の作品をリリース。メロディックパワーメタルの先駆者として知られる。現在のラインナップはAndreas "Andi" Deris - (Vo)、Michael Ingo Joachim Weikath - (G)、Sascha Gerstner - (G)、Markus Grosskopf - (B)、Daniel "Dani" Loeble - (Ds)。

*2 HARD ROCK/HEAVY METALの略称表記。

一般的にも浸透はしているがあまりにも多岐に渡る表記であり、本誌記者的には正直どうかと思っている。まあ、だからと言ってCD屋さんで全部区分けしていたらキリがないですけどね。

そこで、メタルのコーナーが少ないから怒りを感じるのちよっとおかしい、と。聴く人が少ないから仕方ない、というのが自分の考え方なんですけど。だからこそ、希少価値に魅力を感じると言うか。俺達はそれでも好きなんだ！って言う。そこに格好良さを感じます」

SATOSHI「そうなんだ!？」

Mr.G「ストイックやなあー」

MASA「うん、まあそんなんじゃないかなあっていうのが自分の捉え方。敢えて、誰も聴かないような、誰も好きでないようなところに良さを見出す格好良さみたいなのが自分の中のメタル像と言うか。オリコン(*3)何位にメタルが入りました、とかなったら逆に自分は冷めちゃう」

SATOSHI「僕はちよっと違って、X(*4)はすごい売れてるでしょ。あれ、普通に言ったらメロスピじゃないですか。メタル好きも聴く。だから、俺の中では良いメタルバンドがない(少ない)から売れない。Xの曲は素晴らしいじゃないですか。だから、メタルバンドの問題。どちらかと言うと、テクニクに偏りがちな人が多いんだよね」

Mr.G「耳が痛い(笑)」

SATOSHI「ドラムが格好良い、ギターが速い……ヴォーカルの声が高いとか、そっち方面に偏りすぎて……結構、メタルの人ってポップスをバカにしている人が多いじゃないですか」

Mr.G「多いね」

SATOSHI「ヴィジュアルをバカにしたりだとか。自分たちはトップクラスなんだぞっていう驕りが曲を悪くしていき、支持層を減らしていき、みたいな。実際、良いモン作れば売れている。例えばEUROPE(*5)とかね。ああいう良い曲があれば。だから結局、良い曲を作っているメタルバンドが少ない」

REO:5128「自分もSATOSHIさんと似てますけど、やっぱり、ジャンルが偏ってきているところがありますね。ただ、曲よりもテクニクが凄いのが売れた時期が、なんかね、一時期あったような気がするんですよ。結局そこから曲を重視する人が離れて行っちゃって。メタルかってジャンルが細かく分かれてまだそんなに間もなかった事はそれなりに聴く人もいたかと思うんですよ」

Rosen-Kreuz



▲ドラム担当のMASA氏。そのクールな様相からは想像出来ないような熱いドラムプレイは必見。

WORD BOX

*3 ヒットチャートをはじめとした情報サービスを提供する会社。前進である株式会社オリジナルコンフィデンスは1969年創業。日本で初めてのレコード売上ランキング誌「総合芸能市場調査」を創刊。

*4 日本が誇るヴィジュアルメタルバンド。現在ではメタル色は薄いが煌びやかな楽曲の美しさは健在。今のX Japanしか知らない方はぜひ、デビュー当時のアルバムも聴いて下さいね。

*5 スウェーデンのHRバンドで、北欧メタルの始祖とも呼べる存在。1983年デビュー。1986年リリースの「The Final countdown」の大ヒットで有名。この間も某温泉施設で流れていました(本誌記者談)。メンバーラインナップはJoey Tempest (Vo)、John Norum (G)、Mic Michaeli (key)、John Leven (B)、Ian Haugland (Ds)。2009年リリースのアルバム「LAST LOOK AT EDEN」が現在の最新作。

REO:5128「単純に、良い曲がメタルで少なくなつた……まあ、もしかしたら良い曲が表に出てこないっていうバックボーンもあるのかもしれないんですけど、結局それで廃れちゃつたのかなって思うことはあります。そこらへんで、その、業界で宣伝塔みたいな人っているじゃないですか。そういう人の耳が偏ってきちゃっているような気がしますね。雑誌とか見て、コラムニストが「このアルバムはすごく良い」なんて書いてても、実際に聴いてみたら「なんじゃこら」って（笑）」

—例えば伝道師ポジションのトップ、今だと Marty Friedman(*6) になるんですかね。

SATOSHI「ああ〜」

Mr.G「Marty Friedmanの素晴らしいところはあの人はポップスを尊敬してるんだよね。例えば、モーニング娘。(*)は素晴らしいとか」

SATOSHI「ええええええええ」

Mr.G「どうしてかって言うと、日本のポップは曲がすごく多彩なんです。一方で洋楽は何でも似ているんですよ。なんか、判を押したようになってる。日本ってそうではなく、例えば洋食もあれ和食もあれで何でも取り込んでいく。それでMarty Friedmanはそれをメタルに生かせないかなって活動してるんだよね。俺ね、ヴィジュアル系を否定するメタラーの人たちって本当に視野が狭いと思う。別にヴィジュアルは関係なくて、何をやっているか、なんだよね。Xだったらそれは正にメロスピであって、

誰もが聴きやすい、覚えやすい。小泉純一郎(*8)までテーマソングにする」

SATOSHI「そうだね！ 確かにそうだね！」

Mr.G「だから、皆に支持してもらえるんだつたら、俺はヴィジュアルにも力を入れるべきだと思うし、ちょっと可愛い女の子を雇っても良い。ただ、問題はやる音楽だよ。それが一辺倒になりつつある。やっぱり大切なのはメロディ。メロディが素晴らしければそれをオーケストラアレンジにしても、メタルにアレンジしても素晴らしい。だからよくある、クラシックをメタルアレンジしてみました、とかその逆パターンとかね。良いメロディがあれば良いんですよ。それを、今のメタルバンドは悪いけれど、失くしちゃってる」

SATOSHI「確かに」

Mr.G「クサメタル、なんて呼ばれるのがあるけど、あれはメロディが凄く良いんですよ。演奏も下手くそで音質も悪いようなB級、C級のクサメタルがよくもてはやされるのは、メロディが良いから。ダメダメなんだけど、メロディが良いからどうしても聴いちやう、そういうところがあると思うんですよ。だから僕は、まず形から入っても良いと思うんです。格好良いんだぜってところを見せつつ、次に良いメロディ。それでメタルもだんだんと復帰してくるんじゃないかな。例えば今、アニメの世界とかでどんどん出てきてるんだよ。メタルっぽいやつが」

WORD BOX

*6 アメリカ合衆国メリーランド州出身のギタリスト。流暢な日本語を話すことでも知られ、アメリカ国内で行われた日本語弁論大会での入賞経験も持つ。1990年にMEGADETHに加入、2000年に脱退。日本移住後は各種媒体で活躍。

*7 女性アイドルグループ。下手な事書くと敵を増やしそうで怖いですね。いいんじゃないかな、うん。

*8 日本の第87~89代内閣総理大臣を務めた元政治家で現在は国際公共政策センター顧問。Xの楽曲「Forever Love」を用いたTVCMはあまりにも有名。Xだけでなくプレスリーや歌舞伎、相撲などその好みは多岐に渡る。また、2009年の映画『大怪獣バトル ウルトラ銀河伝説 THE MOVIE』にてウルトラマンキングの声を担当したらしい。感動した！のかどうかは不明。

SATOSHI「知らないうちに、実は徐々に浸透してきてるんだよね、メタル。これメタルだろってのがアニメソングになってたり」

Mr.G「そういうところから支持層を増やして、実はこれらの音楽のベースが、例えばMEGADETH(*9)だったんだよ、とか。そうしたら、じゃあそれも聴いてみようって感じでメタルがまた盛り上がっていくのかな。なんかね、日本はこう、メタルだと「誰もよるな」みたいな感じにしちゃってるから、もっと広げたほうが良い」

SATOSHI「そう、海外のバンドはそれ、アルバムに入れてきますからね（笑）だからまあ、日本語の良さを出しつつ、英語もやりつつ。うちら、両方大事！」

MASA「特に、こうじゃなきゃいけないということはない」

SATOSHI「試行錯誤しながらね」

REO:5128「聴いてもらわなきゃ話にならないですからね」

MASA「個人的には、お客さんが日本人で、やる側も日本人で、そこに英語をもってきてお互

聴いてもらわなきゃ、話にならないですからね。

「良いモノがあれば売れる、という関連で今度は歌詞についてお話を伺いたいんですが、バンド結成当初から日本語へのこだわりはあったんですか？」

SATOSHI「いや、僕ももともとは、なんで日本語でやるんだよって（笑）まあ、両方？ 最近は英語も二割、三割入れてきてます。次のアルバムでも、二曲ぐらい……まあでも、そうですね……外国でも聖闘士星矢(*10)とかウケてるじゃないっすか（笑）」

Mr.G「北斗の拳(*11)とかね」

「い分からない……この状態でやる滑稽さ？ オール英語だとやっぱりちょっと違和感があるというか」

Mr.G「心に響かない」

MASA「英語は英語ですごく格好良いんですけど、それをメインの言語にするっていうのは、それはちょっとどうなのかなって」

SATOSHI「全部英語ってのはまずいよね」

MASA「表現の手段として他の言語を使うのは全然あり。ただ日本語が一番、表現の方法としては適切なのかなって」

WORD BOX

*9 言わずと知れたスラッシュ四天王の一角。Dave Scott Mustaine を中心に結成されたメタルバンド。知的スラッシュと称される。現在のメンバーは Dave Mustaine-(Vo/G)、Chris Broderick-(G)、David Ellefson-(B)、Shawn Drover-(Ds)。

*10 車田正美の漫画であり、アニメ、ゲームと幅広く浸透して大人気。1985年～週刊少年ジャンプで連載された。初代テーマ曲「ベガサス幻想」はメタ

ルのアニメソングの先駆的存在と言える。アニメタルやEIZO JAPANによるアレンジは強烈。海外にも多くのフォロワーを持つ。

*11 お前はもう死んでいる。のアレ。原作を武論尊、漫画を原哲夫が担当。テーマソング「愛を取り戻せ」は激熱。流れれば継続確定……はまた違うお話し。本誌記者の残念な青春時代の思い出だったりもする。天に還る時が来たのだ……！



▲REO:5128(B・左)

SATOSHI YONEKAWA (G/Vo 右) 語る言葉にも自然と熱がこもる。

一日本人にはどうもこう、メタルに対する誤解のようなものがあると思われるんですが……メタル、すなわち頼みみたいな。なんだか、メタルバンドはヒトネタ無いと売り出しません、みたいな感じもシーンには根強く残りますし。

Mr.G「SEX MACHINEGUNS(*12)もそうなんだけど……さっき、形から入るのはアリって言ったけどキワモノ化するのちょっとね」

SATOSHI「珍獣扱いはね(笑)」

Mr.G「それはメタルをダシに使っただけでしょ、みたいな感じ。メタルってジャンルがやたらと分かれてるけど、そもそもメタルとロックの違いって何なの？ っていう、そこから定

義しないとみんな誤解しちゃうのかな。僕の意見なんですけど、HMってのは非常にディスティーションなサウンドがあり、激しい。遅くても激しい。衝撃を与える。それがメタル」

SATOSHI「ロックの進化版だからね」

Mr.G「そう、だから、ロックをもっと激しくしたやつですよってだけで、キワモノ化する必要は無い。だからこうやって、結構小奇麗な格好して演奏してますし。そこはもっともっと聴いてほしい部分ですね。さっきも出た話題だえけど実際、今のアニソンとかね」

SATOSHI「これメタルのギターだろうってのが結構ある。聴いているのに知らなかったの？ って(笑)」

Mr.G「筋肉番付(*13)とか一時期あったじゃないですか。あれで、人物が出てくる時に Rhapsody of fire(*14) が流れたり」

SATOSHI「スポーツ番組でもしょっちゅう流れるもんね」

Mr.G「やっぱり格好良いんだよ、メタル。激しくて格好良いからああいう場面で流す」

SATOSHI「そう。燃えるのがメタル！」

後編に続く

WORD BOX

*12 日本のメタルバンドとして一世を風靡。スタイルやメンバーの変遷からデビュー当時よりもファン層を狭めるが今もなお活動中。当初はギャグ要素が強く一般受けを狙っていたと思われる。また、その方向性では一定の成功を納めた。現在のメンバーは ANCHANG-(Vo/G)、KEN'ICHI-(Ds)、SHINGO ☆-(B)。

*13 TBSのTV番組。現在では実質的な継承番組

「サスケ」の無茶ぶりっぷりが有名。日本の番組最多放映地域(世界152国/地域)を誇る。

*14 イタリアのシンフォニックメタルバンド。ファンタジックなストーリー展開がたまらない。現メンバーはFabio Lione -(Vo)、Luca Turilli -(G)、Tom Hess -(G)、Patrice Guers -(B)、Alex Staropoli -(Key)、Alex Holzwarth -(Ds)。現在の最新作は「From Chaos to Eternity」(2011)。



これええやん。

オススメタルレベル：



Divine Wind UNLIMITED WILL

-限りない意志- ¥500

2011.06リリースとなった同バンド3枚目のマキシシングル。リミックス含め14曲を収録し、そのどれもが高い完成度。有名誌でも好評価を得る。収録曲等の詳細はバンドオフィシャルサイト <http://www.ictv.ne.jp/~has513/> をご参照ください。

Fist第一弾はDivine wind徹底特集号ということでこのコーナーでも同バンドを取り上げることにした。ぶっちゃけ話をしてしまうと本誌記者の最近のマイブームバンド、ADAGIOとどちらを紹介するか少し迷ったのだが……（笑）まあ、それはさておき、Divine windの魅力がしっかりと濃縮されたこちらのCD、文字で伝えられる限りを早速伝えていくことにする。

①多彩な楽曲に注目！

本作の何よりも大きな特長はその楽曲の多彩さだ。その上で、多彩なれど本質は見失われずという点、重要なオススメポイントとして挙げておきたい。きっちりメタル、きっちりスピーディー！ 熱い楽曲が盛り

だくさんだ。

②美しい歌詞世界に触れるべし。

Divine windの音楽を語る上で外せない重要なファクターであるロマンティックな歌詞世界をじっくり楽しみたい。シンプルな言葉選びによって構築された世界は分かりやすく、それでいて物語を楽しむのに十分な奥行きを感じさせる仕上がりになっている。一つ一つのシーンを想起させる温かなLyricsと極上メタルサウンドの出会い。それこそがDivine Wind最大の魅力と言えるだろう。まもなくリリースのフルアルバムも必聴だ！

協賛広告募集のお知らせ

インディーズHR/HM電子マガジン「FIST」では、本誌趣旨にご賛同いただける方からの協賛広告出稿を募集しております。まだまだ広告媒体としての力の小さな本誌ではありますが、少しでも情報拡散することの出来る媒体となるべく努力を惜しみません。日本のHR/HMシーンがより盛り上がるよう本誌は常に全力を尽くして参ります。現在、iphone等でご利用いただける専用アプリの開発企画を既にスタート！ 情報発信源、広告掲載先として魅力ある媒体を目指して参ります。是非お力をお貸しください。宜しく願い申し上げます。

募集概要

- 募集サイズ：本誌内1P/0.5Pの二種類
- 掲載可能な内容：Indies HR/HMに関連する全ての内容（スタジオ様、CDショップ様、ライブハウス様、楽器店様等の法人様や、バンド様ご自身の公演告知やリリース情報等も可能です）
- 掲載出来ない内容：法令違反となる内容の含まれる広告、年齢制限を有するコンテンツに関連する広告
- 広告デザイン：お客様ご自身で制作、またはネイヤーズが代行して制作（制作料は写真を基本としたレイアウトの場合、デザイン込¥3150でやらせていただきます。また、本誌用にネイヤーズが制作した原稿情報は外部で自由に使っていただくことが出来ます）
- 広告価格：
1P広告 ¥18000 0.5P広告 ¥9500
- 掲載期間：
電子雑誌版 出稿された号の公開期間中継続（現在のところ、特に公開期間を定めておりません）
アプリ版 最新号差し替え時まで継続（アプリ版では最新号リリースごとに古い号が上書きアップデートされる仕様を予定しております。現在のリリース間隔は年四回となっておりますが、早い段階で隔月刊行となる予定です）
- 拡散予定数：10000DLをまずは最初の目標として宣伝を実施して参ります。
デザインや仕様等、まずはお問い合わせいただければ幸いです。お問い合わせはinfo@neyers.main.jpまでメールにてお願い申し上げます。どうぞ宜しくお願い致します。失礼いたします。



始めまして……

HEAVY METAL

#001 北原 亜稀人

人はどうやってメタルに出会うのだろう。そんな気持ちでスタートした本企画「始めまして……HEAVY METAL」略してハジメタ。どうでも良いけれど「始めまして」って記述してもOKなんですね。本稿書くために調べた修行中の本誌記者です、どうも始めまして（笑）。こちらの企画では色々な方に「貴方はどうやってメタルに出会いましたか？」をテーマにインタビューを実施、回数を重ねていき、メタルと出会いやすいシーンを考察。最終的にはメタル布教に役立てて行こうじゃないか！という崇高な目的を持っているのです。本誌記者、かなり本気です。一つ大きな問題は本誌編集上の都合で出来た余りページを埋めるために急遽考え出された企画故、今からインタビューしても間に合わねえ……これはマズいぞ。というわけで第一回は誰が知りたいんだそんなもん、な感じですが、本誌記者のメタルとの出会いをお話ししてみようと思います。



最初は確か、カラオケボックスだったと思います。僕ね、昔から声高かったんですよ。声変わりが遅かったのもあって、中学の合唱大会なんかで女子側のパートに回さ

れたり（笑）。そんで、友達に「お前、Xとか歌えそうだな」なんて言われて。で、たまたま「Rusty Nail」を知ってて、歌ってみたら唄えた、と。そこからどっつぷりとXにはまりこみ……で、すぐに聴きつくしちゃったんですよ。出てる音源そんなに多くなかったし。さてどうすっかなあ……なんて思ってたある日、とある大手CDショップで「Xとか好きな人は聴いてみよう！」なんてPOPを見かけて、それで買ったのがHELLOWEENの、確か「守護神伝2」だったのかな。もう、衝撃的でしたね。Xに比肩するバンドなんか無い、なんて頑なになってた気持ちなんか吹き飛んで、世界すげえや！って。これが、僕の中での真の意味でのメタルとの出会いですね。Xばかり聴いていた頃は「メタル、っていうカテゴリーでは意識していなかったし。ちょうどその頃にディスクユニオンの御茶ノ水HR/HMを知ったりもして、もう、覚醒ですよ。Angraを聴き、Gamma rayを聴き、Stratovariusを聴き……有名どころから順番に、もう片っ端から聴いてましたね。すっかりMETAL is MY LIFEになっちゃった。まあ、良くも悪くも、なんだけど。



#001 北原 亜稀人

学生時代には随分苦労しましたよ。時代についてなかったのかなあ、というのもありますけど、僕の大学生時代はメロコアとかパンクが大流行りしていた時期で、バンドサークルとか行ってもね、メタルなんて殆ど相手にしてもらえない。Xのコピバンすらメンバー集まらなくて作れないような状態で割と孤独でしたね（笑）。それで（それだけが原因ではないけど）不登校状態になって一年間遊んで暮らしてみたりとかもしましたよ。別に何も変わらなかったんだけど。



で、そのまま社会に出て、もう完全にコミュ障状態（笑）。幅広い年齢層が居る会社だったからHELLOWEEN好きだって人も一人だけいたけどね。会社で流れる有線なんかPOPSばかりだし、なんだか色々疲れてましたね、当時は。ただ、視野が狭かったということもあると思います。当時はPOPSはヌルい、なんて本気で言っていましたもん。今は言ってませんよ？ それぞれにそれぞれの良さがあることは十分分かってるつもり。それらを理解した上で、自分の好みはメタルなんだって事にしています。

最近の悩みは、僕のやるメタル（時々趣味バンドでVo.をやってます）がただの宴会芸になり始めてしまっている事。学生時代の僕だったら絶対断ってたと思うんだけど……有り難いやら腹立つやら、友人の結

婚式ではもう定番になりつつあるんですよね。セリーヌディオンとか、オールディーズの名曲をメタルシャウトしながら歌うの（笑）。今も一曲、オーダーが入って、「I Will Always Love You」でメタルシャウトしろって（笑）なんでやねんって感じなんだけど。だったら普通にメタルやらしてよって思うんだけど、それは絶対にOKが出ないという。本当、どうしようかな、なんて結構真面目に悩んでいます。なので、出来るだけ早く一つの表現手法としてメタルともう一度真正面から向き合いたいと思っています。言うなれば、メタルとの出会いをもう一度やり直す。これ、直近の野望ですね。メンバー募集！（笑）

北原亜稀人

小説家、シナリオライター。近著に「Glorious city」（株式会社ルラック）。映画「ブラックリスター2」脚本制作など、少しずつ活動の幅を拡大中。インディーズ総合支援レーベル「ネイヤーズ」代表として、本誌の制作を始めとした幾つかのプロジェクトを現在も進行中。

（関連サイト）<http://neyers.main.jp>

Do You Know "DOUJIN METAL"?



同人という語を明確に定義するのはなかなか難しい事だけれど、日本現代社会においては、アニメやゲーム、漫画のカテゴリーにおけるアマチュア創作の総称とでもしてしまうのが良いのかもしれない。そして、そんな「同人」とカテゴライズされる中でメタルを奏でる人々は決して少なくない。本誌ではこのジャンルをいまだ冷たい不況下にあるメタル業界を一挙に拡大する救世主と勝手に断

定、特集記事をお送りする運びとなった。今回特集するのは本誌インタビュー内にも登場しているMr.G率いるRosen Kreuz。1stにおいて多くのフォロワーを集め、現在2ndを制作されている、注目度急上昇中のオリジナル同人メタルグループだ。本記事ではRosen Kreuzの制作総指揮を務めるMr.Gを迎え、その取り組みやこだわり、今後の展望等をじっくり、たっぷりお伺いした。

これをゲーム化した時にどう盛り上がれるか。

その始まりと世界観

Mr.G「まずはRosen Kreuzの始まりからお話ししないといけないんですけど、元々は僕が2006年に立ち上げた、たった一人のバンドだったんです。やりたい音楽としては……大学時代に自分で作曲がしくてDTMを始めたんですけど、どういうものを表現したかったかと言えば、ゲーム音楽、特にバトル音楽……それこそ、伊藤賢治さんとかね。ああいうのを自分でも作ってみたいな、と。あと、僕はもうRPGが大好きで、昔はTRPGを自分でやっていたんですよ、ゲームマスターとして。プレイヤー、勇者や魔法使いがいて、その彼らを導いて魔王を倒しに行く、とかね。それで、そういうのを音楽でやろうと思ってたんだけど、先をやっちゃったのがRhapsody of fire（※当時はRhapsody）で、「なんじゃあこりゃあ！」って。伊藤賢治を本気で歌にしたらこうなるのかな、なんて感じで。それで、俺もこれを超え……とまでは言わないけれど、やろうかなって思っていたんですけど、だんだんとメタルが下がってきちゃったんですよ。で、もっとイージーリスナーを取り込まなきゃと思って。最近、アニメとかPCゲームなんかでメタルな雰囲気曲が増えてる。そこで、もしかしたら此処から切り開けるのかな、と。それでRosen Kreuzを作ったんです。で、作ったからには、やるからには、僕のイメージとしてあるのはこれをゲーム化した時にどう盛り上がれるのか、なんです。例えばスーパーロボット大戦なんかだとそのユニットのテーマソングが流れて、それで戦ったりするわけじゃないですか。それに近いイメージでやっている

ので、Rosen Kreuzの世界に登場するキャラクター全部にイメージソングがあるんです。男性が歌っているやつがあり、女性が歌っているやつもある。男女二人で戦っているような、そういう場面の曲もあるんですよ。

「Saviour of soul」とかね。物語に連動して、或いはキャラクターと関連して曲調が変わるので、単純に一つのジャンルではなくて、「そのキャラクターに似合う格好良い曲」を用意してあげる。そういう感じで曲を創っています。

Rosen Kreuzの楽曲、例えば1stだと一番最初から途中までは各キャラクターの曲だったりするんですけど最後に、1stなのにいきなりラスボス戦みたいなのが始まるんですよ。

「Knights of the rose」という曲なんですけど。冒頭はRhapsodyみたいな感じで始まるんですけど最後はメジャーキーに転調して、エンディングと言うか、「物語は終わりました」みたいな感じになるんです。で、一応1stで物語は完結しているんですよ。

でも今、2ndを制作していて、それは有り難いことに「1stでやめます」って言った時にファンの皆さんが「なんでやめるの?」「もう一個やってほしい」みたいな。それで無理矢理……

(笑)。でも、やるからには1stを超えるイメージで創っています。世界は1stと同じRosen Kreuzの世界で、まだ描ききっていないキャラクターのテーマソング、あとは場面を歌にしていこう感じですね。布陣も前回メンバーに加え、かなりすごい奴らを引っ張って来ましたので、もう、是非期待して下さい!

メロディへのこだわり

Mr.G「中学時代はずっとオーケストラばかり聴いていたんです。まあ聴き専なんですけど。その経験もあって、オーケストレーションって本当に素晴らしいなって。あれって、音のぶつかりがなくて完璧に構築されているじゃないですか。それで俺ね、すごいカウンターメロディが好きなんですよ。普通はバックিংがあってメロディが載って終わりなんですけど、そこに第二メロディ、第三メロディと……今度出すやつでヴァンパイアのお姫様が出てくる曲があるんですけど、リードメロディが三つ同時に流れるとかありますから。ピアノソロが弾きつつリードギターが弾いて、そこにもう一つメロディが載ってくる、みたいな。一見するとごちゃごちゃしているんですけど、全部ぶつからないで完璧に構築されている。そういうのをやっていますね。ジャリジャリの音にしちゃうと構築出来ないのもメタラーさんからすると少し物足りないのかもしれないですけど、もう、そういうもんだ！ と。Rosen Kreuzの曲だって言うか、ローゼンっていうジャンルだと思っ下さい(笑)」

オリジナルへのこだわり

Mr.G「まず、同人音楽というものを知ったのがつい最近だったんです。僕の相方でCross Wishというヴィジュアルメタルをやっている奴がいるんですけど、そいつも同人系なんです。その彼にM3に連れていかれてまして。それまでは全然、同人とか知らなかったか

ら自分一人で全部やっていたんですよ。で、行ったらそういう事をやっている人が沢山いて。で、その中で同人メタルというものが確かに出てきている。ただ、完全にオリジナルっていうのがまだまだ少ないんですね。じゃあ何をやっているのかと言うと、誰かが創ったヴォーカロイド楽曲をメタルにしたり、流行している「東方」だったり。そこで、意見は二つに分かれると思うんですよ。完全オリジナルの方が良い、というものとコピーでもなんでもメタルを知ってもらうためには有効っていうのと。「東方」系の楽曲はZUNさんっていう有名なコンポーザーの方が創っていらっしゃる。あの方の創った素晴らしい楽曲があるので、アレンジすれば絶対に良い曲になるんですよ。当たり前ですけど。だから、イージーリスナーがそういうのを聴いて、そこからメタルを知って、「そもそもメタルってどういうの？」って感じでMEGADETHやMETALICA、IRON MAIDENを聴いてみる。そういうのはアリだと思うんです。ただ、それを本当に商業でやっちゃってる人たち、実際にはそういう人の方が圧倒的に多いんですけど、金が儲かるからっていうのは止めてほしい。音楽をけがしている、とまでは言わないんですけど、ちょっと違うだろう？ みたいな。それがやりたいんだったら自分の実力、自分のオリジナリティをぶつけてみろよって。メタル初心者への入門として遊びで作る分には全然構わないんですけど、それをお金にしてガンガン売っていかうっていうのは結局メタルが廃れる原因になる。ただ実際はそれで成り立っちゃっているんだよね」

十人全部が「メロデスです」になっちゃったらつまらない。

続・オリジナルへのこだわり

Mr.G「一つ思うところがあって、カバーやアレンジの同人に比べて何故オリジナルが弱いのかっていう点で、やっぱり良い曲創ってないんですよ。心に訴えかけてくるような良い曲が最近、本当になくなった。だからもう、音楽番組とか観ていると分かるでしょ。半分が昔の曲ですよ。例えば、JPOPに限って言っちゃえば俺ね、ここ三年間で印象に残った曲って無いんですよ。何も無い。有名なコンポーザーが創って可愛い子が歌って売れる、それだけ。構図は「東方」系と同じなんですよ。そんなのは全然ダメ。メタルも、例えばメロデスとか、大体が似てきちゃってる。ネタが尽きてくると言うのか、段々とただのすり直しになってきちゃってこのままでは良くない。ネオクラシカルとかもかなり形式化してきちゃっているしね。ローゼンの曲は「なんだかメタルの技法を使っているけどジャンルが多すぎない？」なんて言われるんです。けれど僕はそれをむしろ狙っていて。さっきも言ったけれどキャラクターのテーマソングなので、十人いればそこには十の個性があって然るべきなんです。十人全部が「メロデスです」になっちゃったらつまらない。そういうのはやりたくないんです。

展開へのこだわり



▲真摯な眼差しで語るMr.G氏

Mr.G「僕はやっぱり一辺倒が嫌いなので、例えばAメロ、Bメロ、サビ、Aメロ、Bメロと来てまた同じサビが来るのはまあ普通なんですけど、それじゃあ面白くないんでそこにまったく違う展開の第二サビを入れたりね。ただ問題なのは、完全に変わってしまおうとプログレ化しちゃうんですよ。着地点が見えなくなっちゃう。それが好きな人は好きなんですけど、正直言って俺は疲れる。だから、何処かに着地点をつけてあげるんです。最終的には「ちゃんと来たか」っていう感じ。聴いた瞬間に何をやっているのかわからない、ていうのじゃなく、だからと言って身乗り出して聴かなきゃいけないようなものでもない。自然体で、リラックスして聴いていて「素晴らしい曲だな」っていうのが本当の音楽だと思っているんです。そういう点では、メタル自体がちょっと、皆を突き放しちゃってるんですよ。だから、もっと裾野を広げていくべきなんです。ただしそれは初音ミクとか「東方」じゃなく……まあ、それも一つの形なんですけど、オリジナルで、聴きやすいアプローチをもっと、ね」

今後のアプローチ

Mr.G「Rosen Kreuzは小説・イラスト・音楽の三位一体で活動しています、基本的にはメディアミックスでの展開になります。まずは今年の冬に2ndアルバムをリリース、その後は同人誌の制作に取り掛かる予定です。内容としてはフルカラーの画集、全二十四話構成予定の小説、設定資料集やコラム漫画を予定しています。小説はね、僕の好きな要素を全部入れています。ファンタジー、ロボットもの、恋愛、音楽……小説の中でも音楽をやっていたりね。2ndのジャケットなんか、スーパーロボット大戦+ファンタジーみたいな感じの、すごい奴が実はもう出来上がりつつあるんです。1stではあまり前面に出してはいなかったんですけど、2ndにはロボットものの歌もあるんですよ。Jam Projectみたいなね。それは男前な感じの女性Vo.と、実は私も歌うんですけど。それで、その一方ですごい恋愛系の、エロティックな要素も入った、大人な歌詞の曲も出てきます。1stとはまたちょっと違うアプローチですね。それで、最終的には小説と連動させていく、と。夢はアニメ化ですね。あとは……格闘ゲームとか！（笑）」

今回たっぷり聴かせていただいたお話し、紙数の都合からやむをえずカットせざるを得なかった部分があることを、まずは本誌からお詫び申し上げます。熱い音楽魂を持つMr.G氏の話をもっともっと聴きたい、という方にお

勧めさせていただきたいのがニコニコ動画にて展開中の「Metal Freaker's Radio」。Mr.To-chan氏とTAMA氏の手掛けるインディーHR/HM発掘ネットラジオ番組の第十四回にてMr.G氏の熱いトークが繰り広げられています。この番組、これはね、メタルファンはこの回以外にも、全部通しで聴いていただきたい。熱い、こつてりとしたメタルワールド全開！一メタルファンとして、本誌記者も全力でオススメ！

Mr.G氏出演回

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm14893748>

（視聴にはニコニコ動画のアカウント取得が必要です）

ITEM CHECK




Rosen Kreuz 1st ALBUM

GENESIS

~ TUZZY MUZZY ~ ¥1400

Mr.G氏制作小説の世界観を楽曲化。超豪華メンバーによる演奏に涙腺崩壊！必聴の一枚。楽曲リスト等の詳細情報については<http://rosenkreuz07.web.fc2.com/>をチェック！Disc Union等各所で通販取扱い。まずはこれを擦り切れるまで聴いて2ndまで全力待機！

夢はアニメ化



WORLD
IS
BEAUTIFUL

本気リメイク、始まる。
9月25日から。

北原 亜稀人

うそつき。

World is beautiful 最終アレンジがついに完了。北原 亜稀人セルフプロデュースによるリミッターカット版が登場！ あなたは、この世界を愛せますか？

NEYERS

連続メタルノベル

鉄匠

by C.A.Rainbow

空

白なく敷き詰められたバスドラ。ディストーションのきいたギターがうなり、ひびき、ベースラインがそれぞれを繋ぎ合わせていく。ヴォーカリストがシャウトを一発。オーディエンスは拳を突き上げ、サビの大合唱が始まる。明けて、ギターソロ。ツインリードが絡み合い、寄り添い、空へ向けて駆け上がっていく。芸術的な十六分音符の群れが一糸たりともぶれることなくハモリで重ねられ、歓声が湧き上がる。

世界中のありとあらゆる問題全てを解決するような主旋律が響き、再びの合唱。音圧が増していく。空間の密度が増していく。ヴォーカリストが客席を煽り、拳の群れがそれに応じる。わたし達は完璧な呼び声に応じられるがまま、ひとつとところに向かって突き進んでいく。その場に居合わせた誰もがそれを受け入れる。調和がその完全性をいよいよ窮めていく……とは言っても、わたしにとっては画面の向こう側の話だ。

何度も、何度も何度も何度も、数えきれないぐらいに観た神のライブだ。最初に出会ったのは近所の楽器屋だった。二年前、高校二年生の春。友達四人と一緒にガールポップなバンドを組んで文化祭でステージに立とう、なんてありがちな話。全員が全員、楽器の心得なんかなかったから、くじでパートを決めた。何かを表現したり披露するよりも、ステージに立つ、そのことが目的だったのだ。わたしはギター。難しそうで嫌だった。楽器屋に行った。あんたはスティック代だけでいいねえ、なんてドラムの子をからかったり、入門用の楽器に触

らせてもらいながら、わいわいぎやあぎやあ。全員が一揃え買い物を終えて帰り際、神々による至高の演奏はレジ横のモニターで、こじんまりと流されていた。すごかった。すごすぎて何がなんだか分からなかった。知らない外国人の五人組。全員が職人のような顔つきのおじさんで、顔つきだけでなく、演奏も職人のように見えた。自分のやるべき事を完璧に分かり切っている、そういう顔。見蕩れた。惚れたって言っても良い。

あの頃は一つ一つのテクニックの名前なんか知らなかった。今は全部分かる。スweep。タッピング、ストリングスキッピング。全てが正確に、パチリと決まっていく。そして、その調和の中に観客は大合唱で切り込んでいくのだ。何から何まで全部が完璧だった。一応言い添えておけば、これは、わたしにとって。実際、その時一緒にいた友達は誰も食いついていなかった。多分、わたしにとって運命なことだったのだ。その場で、お遊びガールポップバンドからの脱退を宣言した。音楽性の違いってやつだ。店員さんにDVDのバンドについて訊いた。バンドの名前はゴースト。ツインギター、ベース、ドラムスにヴォーカリストの五人編成。店員さんの趣味で流していたらしく、ものすごく熱心に教えてくれた。わたしも、ノートに逐一メモをとるぐらい熱心に聞いた。友達みんな、呆れて帰った。そんなのどうでもよかった。ゴースト。ギタリストのデリック・エルウエスをリーダーとする、メロスピ界の重鎮。今年、デビュー二十五周年。

「メロスビ？」

「メロディックスピードメタル。速さだけじゃなく、旋律の美麗さにもこだわってクラシカルな要素を持つメタルバンドのこと」

メタル。メロスビ。この日、ゴーストはわたしにとっての神になり、楽器屋の店員、まことさんはわたしにとっての宣教師になった。二年前。わたしと、メタルの運命的出会い。

*

「みいさん、こんにちは」

第一志望に落ちたせいで無闇に遠い大学は、家から順に、バス、電車、バスで合計二時間半。あんたが悪いんでしょ、と言う両親のごもつともな方針で一人暮らしは許可されなかった。

正義堂、なんてちょっと恥ずかしい名前のつけられたその楽器店は、わたしが家に帰るために乗るバスの停留所のすぐ目の前にあって、店員のみいさんと、わたしの宣教師でもある社長、まこ兄さんの二人だけで運営されている小さなお店。神の存在に始めて触れたあの日以来、週に三日は必ず経由する場所になった。二年欠かさず続いているから、もう習慣と呼んでも良いかも。

「たいした事教われるわけでもないんだからサークルとかちゃんと入ってさ、青春謳歌すべきだと思うんだけどな。これ、大学時代を無駄にしたあたしからのありがたい教えね。彼氏は在学中に予備も込みで見つけておくべし」

「予備って……」

「人にしろモノにしろ、一筋で生きるとそれがなくなった時死にたくなっちゃうでしょ」

「どのサークル見に行っても同じなんでもん。バンドサークル行ってもガールポップやどっかで聞いたことあるようなオリジナルもどきばかり。それに、わたしがメタル好きで何がいけないってのよ」

「まあ、ゆうりちゃんちんまいから、ギャップの衝撃はあるよね」

「成長期の乙女がちんまいって言われた！」

百五十センチって女の子ならそれほどちんまくなと思うんだけどな。確かに各種パーツはコメントしづらいサイズだけど、良いのだ。成長期だから。まだいける。

「みいさんから見たらそこらへんの女子みんなちんまいし！」

みいさんは身長百六十七、出るところも締まるべきところもほぼ完璧な上に美脚小顔つやつや黒髪ロングとかいう悪魔スペックの持ち主だ。わたしとは種族が違うのだと思う。

「悪かったって、大丈夫よ。ゆうりちゃん十分可愛いから」

「まこ兄さんは工房のほう？」

「そう。朝からずっと」

正義堂に通うようになってすぐに、ピック一枚購入ごとに十五分のギターレッスンをしてもらえるようになった。まこ兄さん曰く、ゴーストファンは全員が家族だから当然のこと、だそうだ。わたしがそれにとびつかない理由はなかった。

チューニングの仕方から始まって、ハンマリング、プリング、チョーキング。エレキギターの弾き方、扱い方は殆ど全部まこ兄さんから教わった。週三回、一回十五分。おかげで、そこいらの同年代には負けないぐらいの自信はある……なんて言ったらまこ兄さんに怒られるけど。曰く、どれだけ上手くなろうとも自分の事を「上手い」と思った時から負け戦、らしい。

沢山のギターやベースが展示されているショッパのスペースを抜けて、その奥の階段を上った二階がまこ兄さんの工房。このお店のラインナップのせいでもあるのだろうけれど、一階で販売されている既製品とは価格が一桁、場合によっては二桁違うオーダーメイド品をまこ兄さんは作っている。メジャーになって、メジャーなくせにギブソンもフェンダーも使わないでまこ兄さんスペシャルのシグネチャーモデルでステージに立つのがわたしの夢。妄想。あんまり考えているとよだれが出そうだから、ここまで。

「ゆうちゃんか。ちょっと待ってな。じきに終わるから」

まこ兄さんは目を作業台から上げずにそう言い、その後は黙々と、木の棒のようなものを削っていた。

「棒……」

「ドラムスティック」

「オーダーメイドなんですか？」

「うん……もういいや、後で」

「すいません、邪魔して」

「自覚があるなら良いんだ。まだ納期までちょっとあるから大丈夫だよ」

そう言うと、まこ兄さんは作業台から立ち上がって伸びをした。身長百八十五。わたしからすると見上げる高さだ。足が長くて、ひょろりとしていて、ギターがとても良く似合う。手も大きいから、わたしが「反則だ」と文句をつけたくなるような運指を平気な顔でこなす。師匠で、宣教師で、イケメン。正直好きだ。大好きだ。既婚者だけど。ちなみに奥さんはみいさん。絶対勝てないから、逆に何とも思わない。

「世の中には変わった人が沢山いるんだ。言い換えるなら、変わった人の寄り集まりが世の中だった言っても良い。俺の作ったスティックが一番良いとか言って愛用してくれてるスタジオミュージシャンがいる。結構なことだよ」

まこ兄さんはいつも大体こんな感じだ。わたしにはよくわからない世界の話を、わたしにはよく分からない言葉で紡ぐ。わたしが理解しているかどうかはそんなに問題ではないのだ。まこ兄さんはそういう人。そういう人なところがすごく好き。

わたしの周りには男子はほぼ全部が、自分を理解してもらおうと必死な子ばかり。言っていること分かる？ 俺の話、聞いてる？ そんなに経験豊富なわけでもないわたしでも数回は聞いたことのあるセリフだ。理解、強要、押し付け。求めて、求めて、例えばそれで何かを手に出れたとして、そこに何が残ると言うのやら。わたしにはそれが上手く理解出来ない。それは多分わたしが、誰かに理解してもらうことを半ば諦めているから。わたしとしては、この世界のどこかでわたしと似たような変わり者に廻り逢えば、それで十分。

「難しい顔するなよ、若者」

「いつか出会う変人はどんな人かな、と思って」

「変人ならそりゃ、変な人だろ」

「わたしとよく似た変な人希望」

「ゆうちゃんは絶滅危惧種だからどうだろうな。まあ、成功を祈る。宿題にしておいた譜面はやってきたの？」

「正直、苦戦中です……」

「やってみ」

そう言うとまこ兄さんは、手近にあったギターをわたしに持たせ、そのままアンプに繋いでくれた。狭くて埃っぽい工房にノイズの混ざった歪音が広がる。細いハウリングがひいいん、と生まれ、消えた。まこ兄さんの合図を受けて、演奏開始。

まこ兄さんがわたしの練習用に作ってくれたフレーズ。わたしが一番苦手になっているスウィープ奏法が繰り返されるようになっていて、かれこれ一週間そこでつまづいていた。音が綺麗にぼらけない。固まって、ぶつかって、つぶれる。

「まだまだ、練習不足」

「指が短いからなのかなあ」

「あんまり関係ない。スウィープは難しい奏法だけど、体得するものだから。息吸ったり、ごはんを飲み込むのと一緒なんだよ。体に入り込みさえすれば、とても自然なものになる」

まこ兄さんが同じフレーズを弾いてくれた。教則ビデオのような、完璧な音が完璧に連なっていく。ノイズはすぐにその姿を何処かに隠し、予定通りの音が予定通りに

産み落とされて、それぞれが迷う素振りも見せずにあるべき場所へ取まって行く。わたしがなりたい姿。出したい音。わたしの理想。いつも手を伸ばしている。かすりもしない。遥かとおく、ずっと高い場所。

「まこ兄さんみたいな人がプロじゃないのっておかしいと思うんですけど……」

「俺より上手い人なんかいくらでもいるよ。それに、技術なんて練習すれば誰でも手にするもんだ。その場、その時での上手い下手なんて何の意味もない」

「精進します」

「やる気が出たようで大変よろしい」

「もう一回やってみます！」

「それよりも……ここで提案。ゆうちゃんさ、師匠の言う事聞いてくれるなら当分メロス系禁止にしようか。弾くのは当然、出来れば聴くのもちよつとの間お休みで」

「……はい？」

遠回しに死ねって言われたような気がする。一体、何の罰？

「メタルが弾きたい気持ちは素晴らしいけど、メタルしか弾けないギタリストはひとつも素晴らしいくない。特にゆうちゃん、好みが偏ってるから。ちゃんと弾けるようになるためには他ジャンルもやらないと」

「やればメタル上手くなりますか？」

「ちゃんと練習すれば」

「でも、メタル無しで生きていける気がしないんですけど……」

「じゃあ、本当につらくなったら、聴くのは許可」

「……もう一声」

「よし、今なら正義堂オリジナルピック三枚プレゼント……って、なんで俺が譲歩しなきゃいけないんだよ。やれ、師匠命令だ。逆らったら破門」

破門は嫌。言う事を聞くしかなかった。他に選べる道はなかった。少しの我慢。夢のため、目標のため、上手くなるため。仕方ない、仕方ない、仕方ない。

そして、まこ兄さんの「師匠命令」から一週間。インディーズのガールポップバンドのリードギターになって早三日。ぬるくて可愛くてきらきらしたメンバーと、澀んで、くすんで、目下腐敗進行中のわたし。もっとカッコカワイイ音で弾けとか、意味わからねえし。仕方ない。仕方ない、仕方ない。本当に仕方なかったのだろうか。考えると頭が痛くなってくるから、現在思考停止中。神様、ゴースト様、わたしをどうかお導きください……なんて。こんなお祈り、何処にも届かない。

*

「じゃあ次、きらふューから通していこっか」

リーダーでヴォーカルのサリナが言うと、ドラム担当でバンドのソングライター、ミキがシンバルをシャンシャンと鳴らして答える。きらふュー、とか言うのはこのバンドの代表曲で、正式名称、きらきら★ふューチャー。もう、この時点でげっぷがでそう。なんだよ、きらきらって。ちなみにバンド名はスターナイトラブパラダイス……なんだかわけがわからなくてため息しか出ない。ベーシストがまこ兄さん

の知り合いの妹で、リードギターを長いこと探していたらしい。そこに、破門だけは勘弁してほしいわたしがねじ込まれた。そういう流れ。正直なところ、まこ兄さんから始めてバンドを紹介された時にはちょっと卒倒しそうだった。

キャリアだけは中途半端にあるバンドで、今年で結成三年目。固定ファンもぼちぼち居て、生意気なことに自主制作CD 200枚を完売させたりしている。1stアルバム「きらきら★まっしぐら」だって。音楽性が違うのは仕方がないとしてもそのタイトルは正直ちょっとどうよ、と思うんだけど。

とにかく、他のジャンルで修行を積むことがまこ兄さんの命令で、逆らったら破門。余計な事をして文句を言われるのも鬱陶しいし、わたしにだって、プレイヤーとしての意地がある。だから、もうこのバンドとわたしが関わることによってわたしに堆積していくであろううんざりについてはまとめて無視する事にした。言われた通りのフレーズを言われた通りの音色で弾く。意見もしないし、求められなければ提案もしない。古来、サポートメンバーとはそういうものなのだ。ギターソロ四小節かよ、なんて文句も言わないし、この隙間だらけのリフのどこらへんが格好良いのか説明しやがれとか絶対言わない。わたしは機械。楽譜通り、無表情。しゃんしゃんきらきらしたメンバーの隙間の黒ずみ。それで良いのだ。

C.A.Rainbow

2011年より活動を再開したモノカキ。今後はぼちぼち書くよ、とは本人談。

「つまりCDを委託する場合に気にかけてもらいたいのが**どういう売り方をするのか**、というところだ。ネイヤーズでは受け入れた音源全てに対し本気の販売促進を行っていくことを約束する」「本気?」「ツイッターやサイト上で発売中であることを告知するのはとても簡単なことだ。だが、ただ発売中だけでなく、**どんなアーティストのどんなCDが発売中なのかを**しっかり伝えていく、これが大切だ」「具体的には?」「まず、受け入れた音源に関しては必ず全曲レビューを実施する。これは最初の約束だ。**これが出来なくなる時は、ネイヤーズが音源受け入れをやめる時**だろう。また、HR/HMに関しては専用販売スペースを確保し、独立した運営をしていく」「それだけ?」「委託で一定期間売れなかった音源に関してアーティストの希望があれば**一部を自社仕入して販売を継続する**」「どういう意味?」「委託だと甘く見ず、**腹をくくって売っていくということだ**」「なるほどね」

※委託終了後の仕入再販売枚数についてはアーティスト様からのご希望をいただいた後にネイヤーズで一定の審査後に決定いたします。1枚~最大委託受付枚数の20%となります。

音源引き受けます。 (委託/仕入販売)

「最初から仕入をしてもらうことは?」「勿論可能だ。ただし、**初回仕入については事前に審査させてもらう**」「具体的には?」「まず、仕入可能なかどうか。次に、何枚仕入れることが出来るかどうか。最初から予算を投入する以上は、**自信をもって売っていけるコンテンツ以外は仕入れをしない**。その場合はまず委託からを勧める場合もある」「なんだかそれってケチくさい気が……」「確かにそうかもしれない。だが、内心で今一つだと思っている商品を売っていくことは困難だ。仕入を受け付けたアイテムについては最後まで責任を持って売っていく」「仕入の価格は?」「そのアーティストの過去の販売実績によって、定価の60%から80%だ」「普通だね」「普通だ」「考えてみます」「ネイヤーズはいつでも熱い音源を待っている。**委託、仕入についての詳細は**<http://neyers.main.jp/musics.html>**を一度確認**してくれると嬉しい」

※委託、仕入ともに二次創作品、中古品は取扱いできません。

※販売には全力を尽くしますが100%完売をお約束するものではありません。

※本広告のエラそうな口調はPR上の演出です。



Divine Wind

Rosen-Kreuz

座談会インタビュー後編

後半ではDivine Windの次回フルアルバムについてのお話やメンバーそれぞれのオススメ楽曲やオススメタル、そして「貴方にとってのメタルとは」「貴方の十年後」な

ど、あんな事からこんな事まで根掘り葉掘りとお伺い！（ご協力有難うございました！）熱い熱いメタル魂はファンならずとも必見の内容だ！



—ここからはDivein windの今後の展開についてお伺いしていきたいな、と思います。いよいよフルアルバムを全国展開されるわけですが、今回の方向性や、何かテーマ等あればお願いいたします」

SATOSHI「今回は幅広く、デスも入れます。他にもリーダー（MASA）の書いたバラードとかね」

Mr.G「一貫性としては、それら全部をメタルで共通させているってことだね。全部やっちゃうとなんだか分からなくなっちゃうから、そこはちゃんと引っ張ってる」

SATOSHI「僕らの人生賭けてます。音楽人生の集大成、的な。ここでコケたら終わりじゃないですか」

Mr.G「コケ……いや、終わらないでしょう（笑）」

SATOSHI「まあ、コケてもやるんですけど（笑）今まで結構順調な方だったから。この一年半ぐらい」

Mr.G「あのイラスト(*14)とやっぱ関連があるんだよね？」

SATOSHI「俺の中ではあるよ。歌詞がかなり関連してます」

Mr.G「なんかファンタジーの物語とか、そういう感じ？」

SATOSHI「まあそんな感じすね。ちっと恋愛歌詞多いし。MASAさんの恋愛歌詞で

音楽人生の集大成的な。

すよね？」

MASA「ああー、そうっすね。自分は曲ごとに……」

SATOSHI「『霧雨』も恋愛じゃん」

MASA「あれは『あさきゆめみし』(*15)っていう漫画の物語で、義理の母にちょっと恋しちゃう話」

SATOSHI「義理の母？」

MASA「そうそう。それで、曲ごとにテーマは違って『アニマ』って曲はもう一人の自分って言うか、夢の中で見る他人は自分の一部、っていう話があって、その、傷ついた自分を癒すために他人の像を借りて、自分を癒すための夢を見るっていう」

SATOSHI「恋愛要素っすよね、つまり」

MASA「まあまあまあ、そうですね……。夢の中ですごい理想的な人と出会うんですけど、目が覚めたらやっぱり誰もいない。それは傷ついていることの裏返ってという逆夢的な」

SATOSHI「あとは今回、テンボもね。今回、Dragon force(*16)の一番速いのと同じ速度の曲もあって。やっぱりテクニック面も見せたいのがDivine windなんで。メタルだから、曲が良くて、テクニックもないと満足しないじゃないですか。物足りない」

Mr.G「僕もそうです（笑）」

SATOSHI「でしょ!？」

WORD BOX

*14 本企画最後でもご紹介しているジャケットイラスト

*15 大和和紀による「源氏物語」をベースとした少女漫画。古典導入に高評価されているらしいが本誌編集は残念ながら未読。

*16 イギリスのメロスピバンド。速さが最大の特徴と言っても、このバンドに関しては良いような気もする。現在のメンバーはMarc Hudson - (Vo)、

Sam Totman - (Gu)、Herman Li、李康敏 - (Gu)、Vadim Pruzhanov - (Key)、Frédéric Leclercq - (B)、Dave Mackintosh - (Dr)。現在のオリジナルアルバム最新作は2008年リリースの『Ultra Beatdown』。現在のVo.としてクレジットされているマークは2011年3月加入。

—これまでの楽曲の中で、ご自身でのお勧め曲を教えてもらっても良いですか？

Reo:5128「俺は『I miss you』な気がするんですけどよ」

SATOSHI「これ、次のアルバムの曲も入れて良いの？」

—できれば既発からお願いします。記事を読んだ方がすぐにアクセス出来たほうが良いと思いますし」

Reo:5128「やっぱり俺は『I miss you』かな。メロ良くてスピード速くて」

SATOSHI「僕は今ある中だと『Distiny』かな。あれは自分のマイクさんなんかにも良いって言われる」

Mr.G「『Distiny』って1stマキシの？」

SATOSHI「の、一曲目」

MASA「自分は『UNLIMITED WILL』。あれはDivine windの中で一番ブルータルなのかな。徹頭徹尾ブルータル。自分はDivine windはSATOSHIくんありきだと思ってて、Vo.も速弾きも、多分これメンバー変わったらDivine windの名前でやってもDivine windでなくなる……そういう面も表現されてる曲かな。まあ、全部そうなんですけど」

SATOSHI「北原さん(*17)は『霧雨』が一番好きなんですよね？ 人それぞれ違う(笑)作曲をみんなでやっているのが良いのかもね。一人だと偏っちゃうし。akira君は？」

akira「『限りあるが故の思い』」

SATOSHI「おおお、渋いね(笑)。いや、渋いって言うか、akira君もMASAちゃんの曲好きだからね」

MASA「有難うございます。自分もakira君の曲好きですけど。結構、センス近いのかも」

Mr.G「そういえばakira君の曲ってまだ聞いたことないかも。ソロのやつだけかな」

SATOSHI「えっと、マキシの最後にボーナストラックみたいな感じで入ってる。ボーナストラックとは書いてないけど。あれはakira君の作った曲」

Mr.G「歌入り？」

SATOSHI「いや、ギターインスト」

Mr.G「ああ、だよ。歌入りのやつ聴いてみたいね。アルバムはakira君の入ってるの？」

SATOSHI「歌入りはないけど……ただ今回は1stマキシの『Tomorrow』と『FUTURE』はakira君に全部、ソロとバックアップと弾いてもらってる」



▲akira氏、入念に準備中！

WORD BOX

*17 本誌編集のことです。メタル歴13年。たまにメタルヴォーカリストもやってるよ！

一挙あるメタルバンドの中で、みなさんのお勧めを教えてください。

Mr.G「いきなり俺から言って良い？ 俺、GALNERYUS(*18)です」

SATOSHI「そんなに好きなんだ!？」

Mr.G「好きと言うかですね、エポックメイキングと言うか、例えばYngwie Malmsteen(*19)にしてもRitchie Blackmore(*20)にしてもやっぱり偉大なんです。そういう昔からの流れを全部汲んできて、「クサメタルの答はこれだ」ってやったのがGALNERYUSなんです。僕はさっきも言ったけど良いメロディってどんなアレンジでも良いメロディだと思って、だから、それを持っていて尚且つすごいテクニックもあって、パワーもあるのがGALNERYUSだと思っています。次点は陰陽座(*21)かな」

MASA「えー……俺はどうしようかな。幾つもあるんだよね……まずDARKANE(*22)というスラッシュメタルバンド」

SATOSHI「ダーケイン?」

MASA「DARKANE。スウェーデンのモダンなスラッシュなんだけどそれが結構好きで。ひたすらスタスタって感じなんだけど……あんまり評価されてないんだよね。あとはベタなところで言ったらANGRA(*23)とか。全然違うんですけど、あれで結構メロスピ好きになったんで」

Mr.G「スラッシュとメロスピってまったく逆方向やな(笑)」

MASA「あとはなんだろう……本当に一杯あるんですけど。Blind Guardian(*24)だったら「Imaginations from the other side」とか」

SATOSHI「いいねえ!」

Mr.G「男くせえ(笑)」

SATOSHI「メロディが良いからね、あれも」

MASA「重なってくると言うか、ヨーロッパ的な響き。基本何でも好きなんですけど、こちらへんですかね」

—Reo:5128さんはどうですか?

Reo:5128「あ、俺? 自分は……そうですね～……」

SATOSHI「Yngwieしか聴いてないでしょ、最近」

Reo:5128「え、いや、そんな事は……。まあYngwieは好きですけど。Stratovarius(*25)の「EPISODE」ってアルバム、あれは好きですね。ギターソロでクラシックアレンジなんかあるんですけど、まともに初めて聴いたのがあれだったんですよ。すっごいなあ、と思って。あれを聴いて、その後にYngwieの「Seventh sign」を聴いて、どっぷり」

SATOSHI「あれは良いよね。捨て曲が無い」

Reo:5128「ないですね」

*18 日本のメタルバンド。2003年にバップよりデビュー。高い人気を誇る。現在のメンバーはMasatoshi "SHO" Ono -(Vo)、Syu -(Gu)、Taka (B)、YUHKI -(Key)、JUNICHI -(Dr)。

*19 スウェーデン出身のギタリスト、作曲家。王者。

*20 イギリス出身のギタリスト。Deep purple、Rainbow等で活躍。

*21 日本のメタルバンド。妖怪ヘヴィメタル。ストーリー性の高い和モノメタルとしてイージーリスナーからも高い支持を得る。現在のメンバーは黒猫 -(Vo)、瞬火(またたび) -(B,Vo)、

招鬼 -(Gu)、狩蝨(Gu)。サポートメンバーとして河塚篤史(Dr)。最新アルバムは『鬼子母神』(2011)。本誌記者は「組曲 義経」の「殺してしまえい、が好きです。

実はDivine windの名前は……

SATOSHI「あのへん無いんだよね。『Fire and ice』とか」

Reo:5128「『Fire and ice』は自分はちょっと駄目ですね〜……やっぱ『Seventh sign』。曲が良いんですよ、全体的に。速いのから遅いのかから何から何まで」

SATOSHI「『Forever and one』とかね」

Reo:5128「そうそうそう。『Seventh sign』で完全に虜になっちゃいましたね。他にもいっぱいありますけど、ギターとかメタルを始める前にどっぶりつかったのがその二枚なんで、とっかかりとしては良いのかなあと思います」

akira「俺はAndromeda（*26）っていう北吹のプログレメタルバンドです。多分みんな知らないと思うんですけど聴いてみてほしいですね、あれは」

SATOSHI「なんか、名前が良いね、アンドロメダって。いかにもメロディが綺麗そう。今でも活動してるの？」

akira「あー、ちょっと分からないですけど。1stがすごく良くて」

SATOSHI「絶対Xだと思ったのに（笑）」

「何処でそのバンドを知ったんですか？」

akira「これは友達に教えてもらいましたね」

SATOSHI「今度聴いてみよ」

「そういう、ちょっとしたきっかけで出会って、そこからはまっちゃうんですよ。私もそうでしたけど。」

Reo:5128「僕も友達からですね」

「では次、SATOSHIさんお願いします。」

SATOSHI「僕も一杯あるんですけど、まずはX。で、Yngwie。あと、実はDivine windの名前はDivine fire（*27）ってバンドとStorm wind（*28）ってバンドの二つを合わせたのも由来の一つで（笑）。まあ、神風って意味もあるんだけど」

Mr.G「Storm windか〜」

SATOSHI「Storm windはね、かなりクサメロ」

Mr.G「知ってる知ってる。持ってるし」

SATOSHI「あれさ、ハズレのアルバムないんだよね。歌もあそこから影響受けてる」

WORD BOX（前Pから続く）

*22 スウェーデンのメロデス/デスラッシュバンド。ブルータルなサウンド。現在のメンバーはJens Broman - (Vo)、Klas Ideberg - (C)、Christofer Malmström - (G)、Jörgen Löfberg - (B)、Peter Wildoer - (Ds)。最新作は『Demonic Art』（2008）。

*23 ブラジルのメロパワメタルバンド。『Carry on』があまりにも有名。民族楽器やクラシックを積極的に多用。（マトス脱退後、その色彩はやや薄れ

る）。現在のメンバーはEduardo Falaschi - Vo、Rafael Bittencourt - (Gu)、Kiko Loureiro - (Gu)、Felipe Andreoli - (B)、Ricard Confessori - (Dr)。最新作は『Aqua』（2010）

*24 ドイツのジャーマンメタルバンド。「指輪物語」等をテーマにとったファンタジックな作風が特徴的。有名メタルバンドの中では特筆するほどにメンバーチェンジの数が少ない（現在一回）。（次Pに続く）

一皆さんにとってメタルとは何でしょう？

SATOSHI「メタル……ちょっと、人生になりつつある」

Mr.G「おお……でもなりつつあるよね、本当に」

akira「なんですかね……」

SATOSHI「マイライフとかで良いんだよ？」

akira「じゃあ……マイライフ」

SATOSHI「受け売りしなくて良いから（笑）でも、そうなっちゃうよね」

MASA「自分の大切な一部で、表現の一部です。それにこだわり過ぎず、柔軟に取り入れつつ……自分も、メタルだけっていう時期があったんですけど、作り手として考えた時にやっぱり良いモノ作っていかなくちゃいけないんで。一本だけに真っ直ぐそれだけになっちゃうと可能性は狭まっちゃう。メタルは取り入れつつ、色々な方向を見られれば良いかな」

Reo:5128「なんだろう、生活の潤滑剤ですかね。無いと全てが上手く回っていかない、みたいな」

Mr.G「僕にとってはアグレッシブな気持ちにさせてくれるものですね。聴くのも好きですし、俺自身がその一員としてそれを表現できるのが最高に幸せです」

一十年後の夢、目標を教えてください！

Mr.G「俺はやっぱあれですね、まず妻が欲しいです（笑）。で、子供に、俺と同じように、まあ、同じようにやれとは言わないけど音楽が好きになってほしいなって。そして「俺と一緒に音楽をしよう！」みたいな。出来れば奥さんとも一緒にやれたらいいなあ。あ、でも別にやれる人じゃなくちゃいけないってわけじゃないからね……なんか俺、すっげえ人生プランの話してますね。なんか全然普通の夢なんですけど、十年後ってなるとやっぱりこうかなあ。いつまでも独り身は寂しいので（笑）」

SATOSHI「えー俺は……あ、akira君考えた？」

akira「未定です」

SATOSHI「LUNA SEA(*29)入ってるとかじゃないの？（笑）」

一なんだかそれも似合いそうです（笑）

akira「……………」

MASA「沢山作品を創ってでかい舞台立ちたいですね。でかい舞台立って、沢山のお客さんの前で演奏して」

Mr.G「O-EAST(*30)ぐらい行っちゃおうよ。俺の知り合いも行っちゃったし」

MASA「ねえ、それぐらいの舞台に行きたいですね。それで、ちょっと生活が楽になるぐらい売れたら、そこで初めて嫁さんの事とか考えるかもしれないね」

WORD BOX (前Pから続く)

現在のメンバーはHansi Kürsch -(Vo/(b)), André Olbrich-(Gu), Marcus Siepen-(Gu), Frederik Ehmke-(Dr)。現在の最新作は『At The Edge Of Time』(2010)

*25 フィンランド出身のメタルバンド。煌びやか且つ重厚な切り口の楽曲を多く持つ。ティモ・トルキの脱退以降ロゴを一新。ライブでのコティペルトの動きがなんか可愛い。現在のメンバーはTimo

Kotipelto -(Vo)、Lauri Porra-(B)、Jens Johanson-(Key)、Jörg Michael-(Dr)、Matias Kupiainen-(G)。最新作は『Elysium』(2011)

*26 スウェーデンのプログレメタルバンド。結成は1999年。プログレメタルはあんまり聴いたことないなあ、な方にもお勧め出来ますね、これ。(次Pへ続く)

SATOSHI「あ、次俺ね。王者！（笑）」

—それはチャンピオンベルト的な意味ですか？

（※合間の雑談で格闘技の話題が出ていた）

SATOSHI「あははは、いや、両方（笑） ギターと、プロレス（笑）」

—そのまま書きちゃって良いですか？

SATOSHI「プロレスは本当に好きなので良いと思います（笑）。ふざけないほうがよければ真面目に……も、王者！（笑）あっはっはっは、まあ、インギーぐらいになりたいですよ。あの風格！ あー……でも、このままだと「こいつバカじゃね？」って感じだからもう一個答え用意しておきます（笑）」

Mr.G「えー、王者ってありだと思っただけだな」

MASA「ね（笑）。これぐらいで良いと思っただけだ」

SATOSHI「いやさ、冗談だって分かってもらえなくて「うわー、Divine wind1の奴、調子のってるよ」って（笑）」

MASA「だからさ、王者（笑）ってしておけば良いんだよ」

—ちゃんと（笑）つけておきます。

Reo:5128「十年後ね……それはやっぱりね、何千人とかの前で、MASAさんと同じになっちゃうんですけど、やっぱりやりたいですよ。まあ、作曲とか編曲を含めて、何らか音楽に携

わって生活出来ていれば良いなあ、と思います」

—読者の皆さんへのメッセージ、そして今後の抱負をお願いします。

MASA「うちの売りと言うか、看板のSATOSHI君のハイトーンと速弾きを聴いて下さい。自分もSATOSHI君のハイトーンとギターを使って曲を書くって言うのはやりがいのある事なので、そういうところを聴いてみてください」

Reo:5128「俺は……」

SATOSHI「俺のベースを聴け！とか」

Reo:5128「またそんなことばかり、もう（笑）とりあえず冗談抜きで、Divine windの音楽を聴いて、例えばメタルとかまったく興味のなかった人がそれをきっかけにしてメタルを好きになってくれればすごい嬉しいですね。とっかかり、きっかけがないと、メタルとか聴く機会ってあんまり無いと思うので、Divineがとっかかりになればすごく自分は嬉しいです」

akira「二人のギタースタイルの違いを聴いてもらいたいです」

SATOSHI「かなり違うからねえ」

akira「それぞれのスタイルを楽しむ感じで。あと今後は曲調の幅も広がると思うのでそういうところも楽しんでもらえれば」

WORD BOX（前Pから続く）

現在のメンバーはJohan Reinholdz - (Gu)、David Fremberg - (Vo)、Thomas Lejon - (Dr)、Martin Hedin - (key)、Linus "Mr. Gul" Abrahamson - (B)。最新作は『TBA』（2011）。

*27 スウェーデンのシンフォニックメタルバンド。メンバーはJani Stefanovic - (dr, programming, gu, key)、Christian Liljegren - (Vo)、Germán Pascual - (Vo)。最新作は『Eye of the

storm』（2011）。

*28 スウェーデンのネオクラシカルメタルバンド。スピード感のある楽曲展開とVo.Thomas Vikstromの伸びやかな歌唱が魅力。クサイ展開が好きな方は是非。Thomas Vikstrom-(Vo)、Thomas Wolf(Gu)、Kaspar Dahlqvist(Key)、Andreas Olsson(B)、David Wallin(Dr)。

SATOSHI「日本のメタルを盛り上げて、日本にもこんな奴らがいたのか、ぐらいいままで行きたいと思ってます。まだ発展途上ですけど」

Mr.G「格好良い音楽を聴かせていきたいと思ってます。メタルっていうくくりだけじゃなくて、アニメが好きの人、RPG音楽が好きの人、普段クラシックやジャズを聴いている人にも聴いてほしいな、と。そういう音楽を僕は作っていきたいです」

「ちょうどDivine Windさんのアルバムがリリースになる直前のタイミングでこうしてインタビューさせていただけて嬉しかったです。有難うございます！」

SATOSHI「こちらこそ、どうも有難うございました！」

Mr.G「こちら面白いお話をいただけて」

SATOSHI「Rosenさんも2ndがまた全国に行くもんね」

Mr.G「2ndはね、本当に皆が驚くようなのにするよ。プロとまではいかなくとも、ぼっと聴いてプロと変わらないサウンドクオリティまであげる。そこまで仕上げます。ちょっと苦労しますが、聴いていただいてDivineさんが「こんな作ってきやがった！」って驚いてもらえるようなものを持ってきますので！」

SATOSHI「楽しみですね～！」

Mr.G「マジで楽しみにしててくださいよ。すごいやつになるはずです」

「今年の下半期、熱くなりそうですね！」

Mr.G「まずはDivineさんのアルバム、楽しみにしていきたいですね」

「ですね！ 本日は長時間のインタビューご協力、有難うございました。」

ITEM CHECK



Divine wind 1st FULL ALBUM
DIVINE WIND

ファイナルミッション
JPN / CD / HMHR110915-4 /
2011年10月19日 / 1,000円(税込)
ディスクユニオン、タワレコ、HMV、AMAZON等で予約受付開始。詳しくは<http://diskunion.net/portal/ct/detail/HMHR110915-4> (ディスクユニオン)

WORD BOX

*29 日本のヴィジュアル系ロックバンド。1992年メジャーデビュー。2000年に休止し、2010年活動再開。繊細な音づくりに楽曲展開が個性的だが好き嫌い分けられる。Vo.のRYUICHIがソロ活動を経て歌唱方法を激変させたことも今では懐かしく感じられる。メンバーは RYUICHI-(Vo)、SUGIZO-(Gu,Vio)、INORAN-(Gu)、J-(B)、真矢-(Dr)。最新作は『LUNA SEA』(2011)。

*30 Shibuya O系列のライブハウスのうち最大規模である約1300名を収容可能。1991年に「ON-AIR」(収容可能人数約1000人)としてオープン。その後、向かいに同約600人のON-AIR WEST(現在はO-WEST)が完成、1994年にON AIR EASTに改名。2003年に建て替え工事を終え、現在のO-EASTになる。住所：東京都渋谷区道玄坂2-14-8。本誌記者は数年前にGLAYのライブ観に行きました。懐かしいなあ。

Editor's Note

Fist第一弾の編集をこうして今、
終えようとしています。正直な事を
言ってしまうならば、何度も後悔しました。
ネイヤーズの器量ではこの雑誌のこころみは無
謀だったんじゃないか。何度もそう思いながら
編集してきました。結果として出来上がった誌
面、どうですか？ 少しでも楽しんでいただ
けたのなら幸いなのですが。

有り難いことに本誌にご興味をいただいた
アーティスト様もいらっしやいまして、第二段
が既に企画進行しています。素敵なアーティ
スト様の情報を少しでも拡散していけるよう、常

に最善を尽くし誌面をつくりあげていく次第で
す。どうぞ、末永くお付き合いくださいますよ
うお願いします。

順に謝辞を。まずは本誌インタビュー、撮影
にご協力くださいましたDivine wind様、Rosen
Kreuz様、ご協力本当に有難うございます。お
かげさまで、雑誌の根幹をなす企画記事を作成
することが出来ました。次に、ネイヤーズの編
集方針についてご苦言をくださいました〇様。
有難うございます。もっともっと頑張っ
て参ります。宜しければ、またご意見、ご感想を
宜しくお願ひ申し上げます。

それでは、素敵なメタルライフを！ 拳あげ
ていくぜネイヤーズ！

ネイヤーズ代表 北原 亜稀人 敬白

Fist #00002

HEAVY X'MAS!

~聖夜に響け、クサメタル~

2011.12.25

©N.E.YERS ALLRIGHTS RESERVED SINCE2011.09-

ネイヤーズの電子雑誌「Fist」：本誌に掲載されている画像、テキスト等の無断転載、転用はお断りいたします。CDジャケット、アーティスト様の近影等の諸権利は各アーティスト様が保有しております。これらに関する権利侵害は、特にお断り申し上げます。ネイヤーズでは本誌に関するご感想、ご意見を常時募集しております。<http://neyers.main.jp>内に設置されております「お問い合わせ」ボタンからフォームにてご連絡下さい。編集方針へのご意見、ご感想や本誌の取材を希望するアーティスト様、広告出稿等、どのような内容でも大歓迎です。どうぞ宜しくお願ひ申し上げます。最後までお読みくださいます有難うございました。



N.E.YERS